他者理解能力における児童と成人の比較

プロジェクト代表者：清水 由紀（教育学部・准教授）

1. 問題と目的

人は他者の特性を暗示する行動情報を呈示されると，意図や指示がなくても自発的に他者のパーソナリティ特性を推論することが示されている(e.g., Winter & Uleman, 1984)。例えば，ある人が誰かにどなりつけているのをみると，意図せず（たいてい無意識に）その人に対し「怒りっぽい人だ」という特性をラベリングする。このような自発的特性推論(STI; Spontaneous Trait Inference)は，必ずしも意識化されない implicit なプロセスであると考えられている。これまで，日本人の大学生・中学生においても STI が生じること (清水・小森, 2007)， STI の生起の度合いは大学生と中学生の間では差がないこと(Shimizu & Komori, 2008)などが示されている。

また, 原因帰属におけるネガティビティ・バイアスについては多くの研究において報告されているが(e.g., Reeder & Brewer, 1979), STI においてもポジティブ特性よりもネガティブ特性の方が生じやすいという偏りがあることが示されている(Carlston & Skowronski, 2005)。本研究では，ネガティブ特性の方が STI が生起しやすいという傾向に文化差や発達差があるのかどうかについて検討する。

2. 方法

1）要因計画

年齢群(2;中学生・大学生)×性別(2)×試行タイプ(2；再学習・統制)×特性価(2;ポジティブ・ネガティブ) の4要因計画。年齢群と性別は被験者間要因，試行タイプと特性価は被験者内要因である。

2)実験対象者

中学1年生74名(男38名，女36名。平均13歳10カ月)，大学生64名(男12名，女52名。平均19歳)。

※児童を対象として実験を行う予定であったが，小学校より実験協力が得られなかったため，今回は小学校を卒業したばかりの中学1年生を対象として実験を行った。

3)材料

大学生および大学院生43名を対象として質問紙による予備調査を行った。20の行動記述文を提示し，記述文の人物の特性を最もよく表す語を4つの選択肢から選んでもらい, さらに選んだ特性がどの程度望ましい／望ましくないと思うかを「1:全く望ましくない～5:非常に望ましい」の5件法で回答してもらった。特性語の選択が被験者の90%以上一致している記述の中で，望ましさの評定値が低いものおよび高いものから順に5記述ずつ選び，本実験の材料とした。

4)手続き

Power Pointの画面を呈示して一斉に行った。なお，当初は「再認パラダイム」を用いる予定であったが，実験実施の都合上，集団実施が可能な「再学習パラダイム」に手続きを変更した。

①接触フェイズ：顔写真と行動記述文のペアを呈示した。10ペアは特性暗示文，10ペアは特性を暗示しない中立文であった。

②遅延フェイズ1：文章と顔写真の印象評定およびアナグラム課題を行ってもらった。

③学習フェイズ：顔写真と特性語のペアを呈示した。①接触フェイズにおいて，同じ顔写真に対し，再学習試行では(特性語を含まない)特性暗示文がペアになっており，統制試行では中立文がペアになっていた。つまり，①接触フェイズにおいて特性暗示文を読んだ時点でSTIが生じていれば，③学習フェ

イズでは再学習となるため記憶しやすいと考えられる。なお再学習・統制試行はそれぞれ10試行であり，いずれもポジティブ特性とネガティブ特性が半数ずつであった。

④遅延フェイズ2：アナグラム課題を行ってもらった。

⑤再生フェイズ：顔写真のみを呈示し，③でペアになっていた特性語を回答してもらった。

3. 結果

再生フェイズにおける特性語の再生数(再生得点)が再学習試行＞統制試行となれば，STIが生起したと解釈できる。再生得点(Figure)について，年齢群(2)×性別(2)×試行タイプ(2)×特性価(2)の繰り返しのある分散分析を行った結果，性別の主効果($F(1,125)=10.40, p<.01$)が有意であり，男性よりも女性の方が高かった。また条件の主効果($F(1,125)=37.52, p<.001$)，条件×特性価の交互作用($F(1,125)=21.62, p<.001$)が有意だった。下位検定の結果，条件の単純主効果はいずれの特性価でも有意であったが，再学習と統制の得点差はポジティブ特性よりもネガティブ特性の方が大きかった($t(128)=4.91, p<.001$)。年齢群による違いは見られなかった。

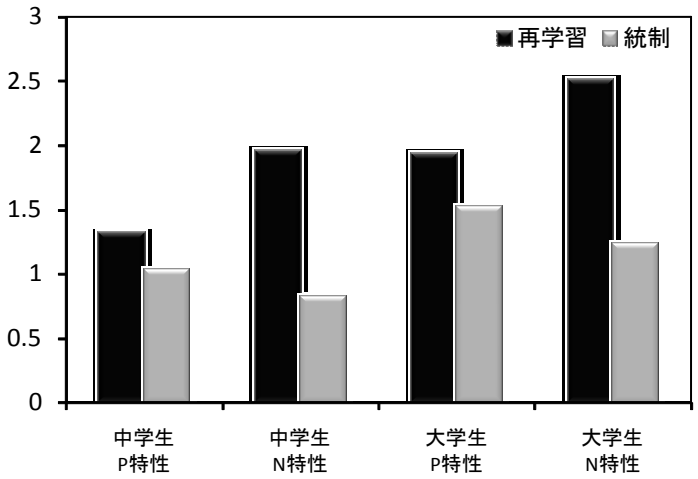

Figure　年齢群・特性価別の再生得点の平均値

4. 考察

本研究の結果から，ポジティブ特性よりもネガティブ特性の方がSTIが生起しやすいこと，またその傾向において中学生と大学生の間には差がないことが示された。特性価による偏りがexplicitなプロセスである原因帰属プロセス同様implicitなプロセスであるSTIにおいても見出されたことから，STIは単なる行動の要約記述ではなく，対象人物についての「特性推論」であると考えられる。またこのようなSTIの形態は，少なくとも青年期前期の時点では成人と同様に発達しており，文化による影響は受けにくいと推測される。今後はSTI の発達に関して児童も含めた詳細な検討が必要である。

5. 引用文献

Carlston, D. E., & Skowronski, J. J. (2005). Linking versus thinking: Evidence for the different associative and attributional bases of spontaneous trait transference and spontaneous trait inference. *Journal of Personality and Social Psychology*, **89**(6), 884-898.

Reeder, G. D., & Brewer, M. B. (1979). A schematic model of dispositional attribution in interpersonal perception. *Psychological Review*, **86**, 61–79.

清水由紀・小森めぐみ (2007) 大学生と中学生における自発的特性推論 －再学習課題を用いた検討－. *日本心理学会第71回大会発表論文集*, p.238.

Shimizu, Y. & Komori, M. (2008) Spontaneous trait inferences among Japanese children and college students. 9th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Poster Session, B108. Albuquerque, USA.

Winter, L., & Uleman, J. S. (1984). When are social judgments made? Evidence for the spontaneousness of trait inferences. *Journal of Personality and Social Psychology,* **47**(2), 237-252.